

略年譜



川端康成のプロフィール

川端康成は「伊豆の踊子」「雪国」「山の音」「古都」などの作品で親しまれている作家で、昭和43年(1968年)日本で初めてノーベル文学賞を受賞しました。

日本の美の伝統を受け継ぎ、日本古来の美しさや哀しみの世界と、日本人独特の感性の動きを、深く純粋な眼でみつめて描きながら、世界に通じる普遍性を持つものとして評価されたのでありましょう。

明治32年(1899年)大阪市に生まれた康成は、両親と死別して、3歳からは大阪府茨木市の祖父母のもとで育てられましたが、その祖父母とも相次いで死別し、15歳で天涯の孤児となりました。

康成少年は、旧制茨木中学を卒業後、文学への志を胸に秘めて上京し、作家への道を歩みます。

その境遇の淋しさを文学に没頭することで慰め、美しいものへの憧れで癒したようですが、肉親との縁の薄い生い立ちは、その文学に深く影をひいています。

次々と作品を発表する傍ら康成は、評論活動も旺盛で、幾多の新人を育て、日本ペンクラブの会長として、また国際ペンクラブの副会長として東西文化の交流に貢献し、日本近代文学館の設立に尽力するなど多方面に大きな足跡を遺しました。

明治			
1899	(32)		6月14日、大阪市北区天満で、開業医川端栄吉とゲンの長男として誕生
1901	(34)	2歳	1月、父結核で死去
1902	(35)	3	1月、母も同病で死去。大阪府三島郡豊川村大字宿久庄(現・茨木市宿久庄)の祖父母のもとにひきとられる
1906	(39)	7	豊川尋常高等小学校(現・茨木市立豊川小学校)に入学 9月、祖母死去。祖父と二人暮らしとなる
1912	(45)	13	大阪府立茨木中学校(現・府立茨木高校)に入学
大正			
1914	(3)	15	5月、祖父死去。孤児となり、豊里村(現・大阪市東淀川区)の伯父にひきとられる
1915	(4)	16	3月、茨木中学の寄宿生となる この頃文学に熱中している
1917	(6)	18	3月、茨木中学を卒業。9月、第一高等学校に入学
1918	(7)	19	秋、伊豆に旅して、旅芸人一行と道連れになる
1920	(9)	21	7月、一高卒業。9月、東京帝国大学文学部入学
1921	(10)	22	東大生の同人誌「新思潮」刊行。「招魂祭一景」を発表
1924	(13)	25	3月、東大卒業。東京で作家への道を歩みはじめる 5月、茨木で徴兵検査。10月、同人誌「芸芸時代」創刊 短編小説を数多く発表。新感覚派として注目される
1925	(14)	26	「十六歳の日記」「孤児の感情」を発表
1926	(15)	27	「伊豆の踊子」を発表。「感情装飾」を出版 秀子夫人との結婚生活が始まる
昭和			
1929	(4)	30	上野に転居。浅草によく通う。「浅草紅団」を新聞に連載
1933	(8)	34	「禽獣」「末期の目」を発表
1935	(10)	36	「雪国」を発表。鎌倉に転居
1942	(17)	43	養女の件で高槻を訪れる。「名人」を発表
1943	(18)	44	秀子夫人とともに高槻を訪れ、従兄の子を養女にする 「故園」「夕日」「父の名」を発表
1947	(22)	48	「哀愁」を発表
1948	(23)	49	日本ペンクラブの第四代会長に就任(～S 40年まで) 『川端康成全集(16巻本)』の刊行が始まる 「反橋」を発表
1949	(24)	50	「しぐれ」「住吉」「山の音」「千羽鶴」「骨拾い」を発表
1957	(32)	58	9月、国際ペンクラブ大会を東京と京都で開催
1960	(35)	61	「眠れる美女」を発表
1961	(36)	62	「古都」を執筆中、京都で暮らす。11月、文化勲章受章
1965	(40)	66	10月、茨木高校創立70周年記念式典に招かれて講演する
1968	(43)	69	12月10日、日本人として初のノーベル文学賞受賞 12月16日、茨木市議会にて茨木市名誉市民に推挙される
1969	(44)	70	10月26日、茨木高校での文学碑除幕式に出席、茨木市役所で茨木市名誉市民章受章および記念講演
1972	(47)		4月16日、自ら72歳10か月の生涯を終える



1 生い立ち一宿久庄での暮らし

両親と死別して二歳七か月で孤児となった康成は茨木市宿久庄の祖父母のもとで育てられることになる。

食も細く、ひ弱な康成は、祖父母に過保護なほどに大事に育てられて、外で遊ぶよりは本を読むことが好きな、内気なこどもであった。

小学生となった年の9月に母代わりの祖母が亡くなると、眼の不自由な祖父との二人だけの生活は、一段とひっそりとして、読書でまぎらわす日々であった。



小学校時代の習字

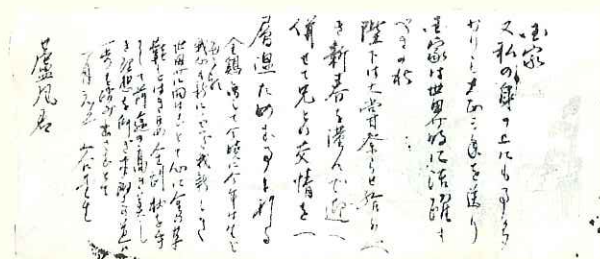
小学校時代の綴方清書帳



2 旧制茨木中学の頃

旧制茨木中学2年生の頃、作家を志す。創作を始めて、新聞社に投稿もして将来への野心を温める。

後に「十六歳の日記」として発表されたのは、中学3年生5月の、明日をも知れぬ祖父の看取りの日記である。



大正4年（1915年）1月元旦 康成中学3年（14歳）祖父が亡くなった翌年、親友（盧風）にあてた賀状。文学への志を年頭の決意として述べている。署名の谷堂は亡父の号を用いたもの。

4 その文学と作品（戦後）

戦後は、日本の伝統的な美意識や自然観に自らの世界を深めて生まれた「山の音」「千羽鶴」「古都」などの他、「眠れる美女」「片腕」などが書かれた。



原稿「寒の櫻」（「山の音」の「島の夢」の章として発表）



「山の音」初版本
昭和29年 筑摩書房



昭和30年頃から、海外での日本文学の紹介が始まり、川端作品も「雪国」を初めとして、多くの作品が四十数か国語に翻訳、出版された。



5 ノーベル文学賞受賞



昭和43年（1968年）12月10日、スウェーデンのストックホルムでのノーベル賞授賞式。

受賞記念講演は「美しい日本の私」と題して、サイデンステッカーの同時通訳で行われた。

6 ふるさとの家

“小学生の頃から私は毎日のように、庭の木斛^{もっこく}の樹上で本を読んでいた。松の老木に次いで祖父が愛した庭木で、この木斛もかなり老木だった。そこが自分の巣であるかのように木の上にいた。……真夏の昼寝などは、やはり庭の大きい檜の木陰で……、私は石の上に仰臥して檜の枝の蟬を聞いたり、眼を細めて葉のあいだの空を見たりしたのを覚えている。”（「故園」から）



祖父母と暮らした屋敷の模型（1/20）

7 テーマ展示

川端康成その人や文学につながる作家たちにも視野を広げて、3～4か月毎にテーマを設定し、館蔵資料を中心に展示を行っている。



川端文学散歩
川端文学に描かれた
茨木・大阪・近畿

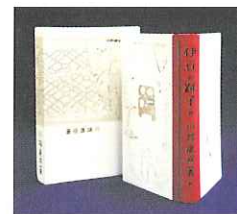
ビデオコーナーA
「十六歳の日記」の舞台
「伊豆の踊子」の舞台
川端康成「ノーベル文学賞受
賞—1968年」
文学碑「以文会友」除幕式と
茨木市名誉市民推荐式

ビデオコーナーB
川端康成を育んだ豊川の里
川端康成と茨木のまち
川端康成「ノーベル文学賞受
賞—1968年」
文学碑「以文会友」除幕式と
茨木市名誉市民推荐式

3 その文学と作品（戦前）

東大在学中に「招魂祭一景」で文壇に登場し、卒業後は新感覚派の新進作家として注目を集める。

掌編小説ともいわれる短編小説を数多く書き、「伊豆の踊子」で一躍有名になり、「浅草紅団」「雪国」と発表のたびに作家としての地歩を固めた。



「伊豆の踊子」（他9編）
昭和2年 金星堂